

V・デル・リット編『スタンダード総合書誌』

高木, 信宏

<https://doi.org/10.15017/10031>

出版情報 : Stella. 19, pp.147-152, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



V・デル・リット編『スタンダール総合書誌』

高 木 信 宏

21世紀の幕開けまで残すところ僅かとなったが、スタンダール研究においても実りゆたかなこの百年を締めくくるのにふさわしい企画が相次いで具体化している。1997年にチャンピオン書店から作家の総合書簡集の刊行が開始されたのにつづき、昨年末には長らく待望されていた『スタンダール総合書誌』の第1巻目がついにイタリアの CIRVI より出版された¹⁾。いずれも編纂の責任者としてグルノーブル大学名誉教授ヴィクトル・デル・リットの名を冠する仕事だが、スタンダリアンならば誰もがこれらを手にして深い感慨を覚えずにはいられまい。ここであらためて述べるのも憚れるほどだが、アンリ・マルチノ亡き後、大学教育の場のみならず、季刊誌『スタンダール・クラブ』の主宰としてこれまでに多くの後進を育成し、スタンダール研究の礎を築きあげた同氏の功績の大きさは計り知れない。主著『スタンダールの知的生活』(1959年)をはじめとする精緻な研究論文を公にする一方で、貴重な未刊書簡や資料の数々を世に送りだし、つねに斯界を先導している。ともすると見過ごされがちだが、今日のいかなる作品解釈の試みであろうとも、比類なき厳密さで知られる氏の校訂の恩恵に浴しているのだ。彼が1967年から1974年にかけてジュネーヴのグラン・シェーヌ書店主エルネスト・アブラバネルと共同で監修したビブリオフィル版は、チャンピオン版の復刻分にくわえ新規資料や綿密な注解などを付したテキストからなる校訂版全集で、まさに実証研究の精華といえよう。80年代に入ってもなお止まることを知らぬその精力的な歩みは、ガリマル社のプレイアド叢書から出された4巻の校訂作業にも大きな足跡を残している。このたびの書簡集と書誌の仕事によって多年にわたる一連の偉業が成就されるのを目にし、スタンダール研究の未来を準備する碩学の壮大なスケールに皆一様に圧倒されたのではあるまいか。

本書の特徴を把握するためにも、これまでの主な書誌をふりかえっておこ

う。まずは1903年にアドルフ・ポープが発表した『スタンダール作品史』である²⁾。各作品の年代順の書誌情報に、その成立事情や作品に対する批評言説の抜粋などが添えられているが、残念ながらそこに見られる多くの解釈がすでに時代遅れであるのは否めない。デル・リットが序文で述べているように、『スタンダール総合書誌』においては編纂者のコメントが関連書評のレフェランスなど最小限度の情報に抑えられているのも、ポープ書誌の前例があるからである。また研究業績への数行での評価はえてして月並みであったり、偏った見解に陥ったりするが、こうした危険性を避けるためでもあるのだ。1914年のアンリ・コルディエの『スタンダール書誌』では、収録文献に通し番号が付され、題名と著者名による索引もあって検索の利便性は向上している³⁾。編纂者の作家観が反映されない中立的な立場から基礎的情報の収録が計られてはいるが、しかしデル・リット総合書誌と比べるならば、集められたデータの差は歴然としている。単純計算しても3倍近い収録点数の開きがあるのだ。もちろんポープの書誌として例外ではない。いずれも今度の総合書誌の登場で本来の役割を終えたといえようが、スタンダール研究史の領域においては資料的な価値がなくなったわけではない。今世紀初頭の伝説的な〈スタンダール・クラブ〉に縁りの深いポール・レオトーやポール・ブルジュといった文人たちが、どのような版にアクセス可能だったのかが分かるのも、同グループの古文書学者を自認するポープのおかげである。皮肉なことに書誌情報の欠落ですら、かえって当時の文献状況を推定する手がかりとなってしまうのだ。

つづいてグルノーブル市立図書館主任司書ルイ・ロワイエによる『スタンダール書誌』(1928-38年)をとりあげよう⁴⁾。同書誌の手柄は時代の変化にいち早く対応した点にある。それは収録情報の国際化と隔年ごとの継続刊行という企画に端的に表れている。第1次大戦を境にスタンダールを取り巻く出版状況は著しく変化した。1930年にはすでに読者層の大衆化がはじまっており、しかもその波は国際的な広がりを見せていた。ロワイエはスタンダール関連の出版が増加の一途をたどることを見越していたのである。その意味では、おそらく同書に総合書誌の萌芽を見ることも可能であろう。だが、その編纂方針の原型といえるのは、やはり1955年にデル・リットがグルノーブルのアルトー書店から刊行した『スタンダール書誌(1947-52年)』ではあるまいか⁵⁾。1938年9月に他界したロワイエの遺志を引き継いだ若きデル・リットは、自身の3

作目にあたる同書で先行書誌に対する批判的な検討を一举に進めた。飛躍的に変わったのは、まずデータの選別・取捨をおこなわずに収録の網羅性がいっそう追求された点であろう。発表媒体の学術性の有無にとらわれることなく収録対象が広げられており、これに附随して分類項も先行書誌とは一新されている。アルトー版以後、デル・リットは書誌発表の場を自身が監修するスタンダード叢書、ついで『スタンダード・クラブ』誌上へと移していくが、基本的な編纂の方針は若干の手直しを経ながらも現在に至るまで踏襲されたのである。

したがって『スタンダード総合書誌』に結実したデル・リットの編纂の理念としては、作家にかんするあらゆる種類のデータを網羅し遺漏なく収録するという原則が第一に挙げられよう⁶⁾。かかる完璧を期す氏が過去の書誌情報の単なる総合に満足するはずがなく、自らが書誌作成に携わる以前の情報はもちろんのこと、これまで積みあげてきた自身の成果に対しても妥協せずに再調査・再検証を行っている。現在までのところ、1814年から1925年までを対象にする第1巻につづき、1950年までの情報を記載した第2巻が公刊されているが、すでに書誌データは6339件を数える。とりわけ目を引くのが1938年以前の書誌に漏れていた多くの新規情報である。たとえば、スタンダードがイギリスの雑誌等に発表した記事や書評がすべて収録されていて、発表年ごとに整理されている。同じくポープ、コルディエ、ロワイエの各書誌にはなかった、初版本や書簡などの競売記録が1860年に遡って掲載されたのも喜ばしい。しかも競売カタログの記載事項がそのまま再録されており、なかにはかなり詳しい状態まで分かる物件もある。各国語翻訳の項もかつてない充実ぶりで、頁を追いながら第2次大戦以前のスタンダード作品の国際化の軌跡をたどることが可能になった。フランス以外の単行研究書や研究論文などの状況も同様で、むしろこれには編纂協力者として名を列ねる16カ国の研究者たちの貢献が大きい。ちなみにわが国からは南山大学の栗須公正氏が加わっている。このほかにも目新しい項目として、博士論文、漫画、映画や、作家の墓や彫像に関連する記事、各種セレモニー、ラジオ番組、著明研究者の死亡記事などが挙げられるが、こうした種目はアルトー版以降の書誌ですでに示されているように、時代の推移にしたがってさらに増やされていくことになる。

つぎに多岐にわたる収録データが年代順にどのように分類・整理されている

のかを具体的に見ておこう。基本的な構成はデル・リット自身の先行書誌に倣っており、書評などの関連情報を除き、通し番号が付されている。まずスタンダーの著作にかんする分類は「作品」「翻訳」「未刊資料」「競売」の4項目からなる。各版本についての記述は、タイトル、副題、出版地、刊行母体、出版年、頁数といった基礎的な情報に限られていて、印刷用紙、組版、印刷部数など物理的な詳細についての記載はない。ただし本書では書評の参考文献が網羅されており、海賊版についての表記もある。しかも情報の羅列に終止するのではなく、各国語翻訳の情報はさらに国別に整理され、競売記録の項でも書簡、草稿などの自筆文書、初版本、蔵書といった下位区分が用いられるなど利用者への配慮が窺える。

研究・批評文献リストの方は、「単行研究書」と「研究論文・エッセー・研究ノート」との2項目に大きく分けられ、必要に応じて「翻案」や「演劇」など周辺情報の項目が増補されている。こちらではフランス内外の区別はなく、著者名によるアルファベット順の配列を採用している。記載事項が基本的な記述を中心としている点では変わらないが、関連書評のほかには論述対象などについての慎重なコメントが附随する。ところで各巻末に索引はなく目次のみが置かれているが、予定では最終巻が総索引にあてられることになっている。おそらくスタンダー叢書版の書誌と同様に、その構成は著者名・書名・定期刊行物・主題などの複数項目からなるはずで、いずれ検索の利便性がいっそう高まるものと思われる。

このたびのデル・リットの功績は、現在望みうる最高の網羅性を備えた総合書誌を完成しただけではない。彼は本書によって21世紀における書誌づくりの指針を同時に提起したのである。たとえば、その後継者にとって編纂協力者の国際的な組織化は不可欠な前提となった。収録の対象としても既存の各種記録メディアに収められた映画作品等はいうまでもなく、今後はCD-ROMやDVD-ROMなどの電子テキスト、そして各国の研究会・個人研究者によるインターネット上のホームページなどの情報にも幅広く目配りをするようになる。しかも情報収録と検索のいっそうの効率化を実現するためには、とうぜんネット上での公開も視野に入れてデータベースが構築される必要がある。情報の終わりなき更新が書誌の宿命といえるならば、これこそ理想的な発表媒体なのではあるまいか。しかしながら、われわれが本書に学ばねばならないのは、

なによりも斯界の泰斗が身をもって示した、情報収集にかける徹底した執念と目先の功をあせらぬ長期的な展望にはかなるまい。『スタンダール総合書誌』は、世界中のあらゆるスタンダリアンに必携の書であり、まさに今世紀の掉尾を飾る金字塔なのだ。

註

- 1) *Bibliographie stendhalienne générale*, sous la direction de V. DEL LITTO. Moncalieri: CIRVI, coll. «Biblioteca des viaggio in Italia», 6 vol. prévus [2 vol. déjà parus, 1999–2000, 500 pp. chacun].
- 2) Adolphe PAUPE, *Histoire des Œuvres de Stendhal*. Introduction par Casimir STRYIENSKI. Paris: Dujarric et Cie, 1903, 448 pp.
- 3) Henri CORDIER, *Bibliographie stendhalienne*, Paris: Libr. Champion, 1914, XI-416 pp.
- 4) ロワイエが作成した書誌のうち 1928–33 年度分は現在でも以下のリプリント版で入手可能である——*Éditions du Stendhal-Club (1922–1935)*, Genève: Slatkine Reprints, 1974, pp. 651–669 et 690–731.
- 5) Victor DEL LITTO, *Bibliographie stendhalienne (1947–1952)*, Grenoble: Arthaud, 1955, 124 pp.
- 6) 80 年代以降にフランス本国以外で登場した 2 つの書誌はデル・リット版とは異なる編纂方針をとっており、是非ともここで触れておかねばならない。まず、わが国の栗須公正による書誌（桑原武夫・鈴木昭一郎編『スタンダール研究』、白水社、1986 年、423–773 頁）。先行書誌の成果に著者独自の調査が加わった収録情報の網羅性はきわめて高く、リストの作成においても新しい趣向が随所に取り入れられている。とりわけ作品別書誌やテーマ別書誌における分類は詳細をきわめ、優れた検索の利便性を提供している。また邦語文献目録は日本における受容史研究に必須の手引きといえるであろう。同書も書誌づくりのあり方にひとつの揺るぎない方向を提示しており、フランス語での増補版が待ち望まれる。もうひとつはシラキュース大学版『フランス文学批評書誌（第 5 巻「19 世紀」、第 1 分冊）』である（*A Critical Bibliography of French Literature*, vol. V, part I, Syracuse: Syracuse University Press, 1994, pp. 265–322）。カナダ・クイーンズ大学教授ジャン＝ジャック・アムを中心として編まれたこの書誌は、主要な校訂版や単行研究書・研究論文の選別的書誌であり、各々のデータには編纂者たちによるコメントが付されている。両書誌に共通するのは、文献に容易にアクセスできないフランス以外の研究者に検索の効率化をもたらした点であろう。デル・リットの方針に照らせば、評

価を付すシラキース版が危険性を孕むのは否めないが、物理的な障碍にくわえ膨大な量の文献に立ち向かわねばならぬ新人の育成という観点からは、こういった試みも積極的に評価されてしかるべきであろう。